

会長挨拶 財団法人 太平洋人材交流センター 会長 井上 義國

司 会

「PREX外務大臣表彰受賞記念フォーラム」を開会させていただきます。

私ども太平洋人材交流センター(PREX)は、2008年2月の「関西財界セミナー賞2008特別賞」受賞に続きまして、2008年7月「平成20年度外務大臣表彰」を受賞することができました。本日はこの栄えある「外務大臣表彰受賞」を記念したフォーラムでございます。本フォーラムが、途上国の人材育成支援、人的交流の意義についてあらためて考える機会になればと願っております。

また、本日は専門家の先生方の体験談、実践事例発表を予定しております。この発表をお聞きいただきまして、どのような方が、どんな形、内容で、日頃、PREXの活動にご支援、ご協力いただいているかということの一端をご紹介できればと思っております。また、われわれPREXの設立の趣旨、あるいは活動実績、実際の活動の様子なども合わせてご報告させていただければと思っております。

最初にPREX会長 井上義國よりご挨拶を申し上げます。合わせまして、PREXの設立の趣旨、経緯、理念と使命、活動実績、今後のビジョンなどにつきましてもご紹介させていただきたいと思っております。

井上会長

本日は、お忙しいなかをこのフォーラムに足をお運びいただきましてありがとうございます。

PREXは、昨年「外務大臣表彰」を受けました。設立して、18年経ちましてやっと世の中に認められたかなということで大いに喜んでおります。

PREX設立の経緯

PREXが18年前にできた経緯、その背景を

簡単にご説明いたします。歴史はずいぶん遡るわけですが、関西経済同友会という団体があり1972年に東南アジア社会経済調査団を出しました。1972年というと、東南アジアで、反日運動が起こりそうな気配がありました。東南アジアの国々は、日本の援助、協力が必要なのに、なぜ反日運動を起こそうとするのか、反日運動の親玉に会って、いろいろ意見交換をしようではないか、ということになりました。1972年の11月でしたが、その気配は続いておりましたが、まだ、実感はありませんでした。しかし、世の中の変化というのは、われわれが考えているより早いもので、調査団が帰る11月の末になりますと、タイで日本品不買運動が起こり、翌年の1月には田中角栄首相がインドネシアで反日大暴動に遭いました。

関西は、アジア、太平洋と結びつくことが、将来の発展のために必要であるということで、アジア、太平洋に焦点を向けたいろんな活動をそれから続けてきたわけがあります。

10年後の82年に東南アジアの日本に対する感情はどう変わったかと申しますと、反日運動の火が消えて様変わりになっていました。アジアの国々と日本との経済格差が非常に大きいというところに反日運動の起こる源があったわけですが、10年たって、アジアの国々がそれなりに発展を遂げたことが反日運動の火を消していったというのが、原因のひとつと思います。

それから85年には太平洋協力調査団を、やはり、関西経済同友会から出しました。21世紀は太平洋の時代であるというふうな言われ方をしておりましたが、太平洋をアメリカのワシントンから始まってカナダに行き、オーストラリアに行き、という世界一周をするような太平洋協力調査団を出しまして、今後の太平洋経済協力はいかにあるべきか、について提言したことがございます。そのなかに、これからは、アジア太平洋の途上国の人材育成に協力することが日本の役割として非常に重要であり、そういう機関を関西につくるべきであるという提言をしております。88年に

は P E C C (太平洋経済協力会議) 総会が日本で初めて行われました。

P E C C というのは、いまさら説明するまでもないかと思いますが、太平洋を囲む、当時 15 の国と地域とが太平洋経済協力会議というのを作りまして太平洋の国々が協力してやるべきことは何かということについて、いろんなプロジェクトをつくって検討をしておりました。P E C C の総会は第 6 回目でありましたが、日本で行われたのは初めてで大阪で行われました。そこで 82 年に提言しました途上国の人材育成に協力する機関を大阪につくろうという提案をし、非常に熱烈なる賛同を得て、90年に P R E X が誕生しました。その後も 95年に A P E C の総会が日本で初めて開かれたときも大阪に誘致するなど、関西は、いろんな面で太平洋諸国との結びつきを深めていかなければならないということで、次々にいろんな策を実施しました。その一環として人材育成に協力する P R E X ができあがったわけがあります。

そういう経緯がありまして、P R E X の基金は 34 億円ありますが、その 8 割の 28 億円を関西の企業が出しました。残りの 6 億から 7 億が、関西の地方自治体です。国からは一銭ももらっていないわけがあります。P R E X の設立の目的は、O D A のおカネを使って途上国の人材育成に協力する機関をつくること、人材育成のなかでも技能、技術のトランスファーではなくて中堅マネージャーの育成に力を注ぐことです。アセアンの国々、あるいはアジア太平洋の国々が、これから発展していくにつれて資本家とワーカーはいるけれど、中堅マネージャーは必ず不足する事態に陥るのではないかと考えたのです。

こうした経緯から、18年前の1990年、太平洋周辺諸国に基軸を置いて、かつ中堅マネージャーの育成というところに重点を置いた研修機関ができたわけがあります。このことは、また P R E X の特徴にもなりました。

PREXの実績と特徴

これまで実績としては、18年間で対象国が120カ国、研修人員が12,000人を越えました。12,000人というのは多いか、少ないか、というのは見方にもよります。中堅マネージャーの育成に重点を置いておりますから、たくさんの人を集めて、いっぺんに研修をやるということにはまいりません。そういった意味で、一回の人数は極めて限られた数です。しかもマネージャーの育成をやるというのは、いったい何をやるのかということになるわけですが、本に書いてあるものを読む、あるいは現地を見たりするだけではマネジメントの勉強になりません。最も勉強になるのは、優れた企業経営者とひざを突き合わせて懇談をすることによって、その中から何かをつかんでもらうことです。P R E X では、そういう研修スタイルを取っております。

関西の企業というのは、P R E X に基金を出すことが個々の企業にとっては、すぐさま見返りがないわけでありましたが、それでも30億近い基金を供出してもらえ、また研修では企業に研修生を受け入れてもらう必要があるわけですが、この研修生を受け入れることに関しても、極めて快く協力していただける。大企業と言わず、中堅企業にいたるまで、快く受け入れていただけるという、そういう風土が関西にはあります。

しかも、関西には、大企業から中堅、中小企業に至るまで、あらゆる業種にわたって優れた企業があり、優れた経営者がそこに存在します。そういった人々と、途上国の中堅マネージャーとが、ひざを突き合わせて懇談し、マネジメントとは何なのか、自分が日頃悩んでいる問題について、いろいろ意見交換することによって、研修参加者に何かをつかんでもらう。それを本国に持って帰ってもらって役立てていただく。P R E X では、そういうことを、繰り返しやってきたわけです。関西には、受け入れていただける企業が多い、優れた経営者がたくさんおられる、そういう風土がある、この点が、P R E X が関西に本拠を置いてあることの強みの一つであると考えております。

設立後は、国際協力機構（JICA）、海外技術者研修協会（AOTS）と手を組みまして、JICAの案件について、われわれが実施するところからスタートいたしました。最近ではPREXが提案し、それをODAのおカネを使って実施するという案件が50%を超えるようになりました。PREXは、いま申し上げましたように、民間がおカネを出し、民間企業で研修を受け、なおかつPREXの職員、約20人のうち、毎年、10人ほどの人々が民間企業から、手弁当で出向していただいて働いていただいています。これが、18年間も続くというのはたいへんなことで、関西の企業経営者のふところの深さ、将来を見据える目といったものに感激するわけです。そういう民間企業で研修を受け入れた場合、中堅マネージャーとしての勉強をするのに何が問題なのかということについては、政府機関よりは、民間企業のほうがはるかによく知っているわけでありまして。そういった問題を企画化しJICA、AOTSに提案することで研修を実施しつづけてきたということです。

PREXの目的には、もうひとつ別のものもあります。アジア太平洋諸国の中堅マネージャーの研修事業を実施することによっていろいろな人に関西、大阪を一度は訪ねてもらい、そのことによって関西の良さ、雰囲気の良さ、環境の良さ、いろいろなことについて人々に認識してもらって関西の国際的な人材交流を活発にしていこう、それが関西の発展につながるのではないかと考えてあります。「太平洋人材交流センター」という名前がついたのも、そういう狙いがあるからであります。単に研修をするだけなら、研修センターとか、教育センターとか、そういう名前の付け方もあるわけですが、「太平洋人材交流センター」という名前を付けたのは、人の交流を活発化することによって関西の活性化を図ろうという意味と、日本から一方的に何かを教えるというような高い目線ではなくて、日本が研修に来られた国々から学ぶべき点も学ぼうではないかと考えて

方もありまして「人材交流センター」という名前になったわけでありまして。

去年、「関西財界セミナー賞2008特別賞」をいただいたり、「外務大臣表彰」をいただいたりいろいろなことでPREXの活動が認められました。しかしながら、これまでとおりの活動を続けていけばよいのか、これからの10年PREXはいかにあるべきなのか、従来通りのやり方を続けていったのでは発展はありません。あるいは、皆さんに、あるいは途上国の方々に感謝されるPREXではなくなるはずで。今後、10年間、PREXがどんな団体でありたいのか、何をめざすべきなのか、昨年、ビジョンをつくりましてそのビジョンを実現するための中期アクション・プランもつくりました。ビジョンとしては、たいへん抽象的な言い方かもしれませんが、PREXがなくなったら、途上国は困るというような存在になろうではないかと。PREXがなくなったら、関西が困るという団体になろうではないかと。そのために、われわれは何をなすべきなのか。何を目標にすべきなのか、という点を中期アクション・プランの中に盛り込んでいるわけでありまして。そういった意味で、今年から、PREXは過去のやり方も変えて新しい分野、新しい研修内容、新しい研修方式というものを研究しながら、今後も途上国にとって役立ち、関西の発展にとって役立つ団体でありつづけたいと考えております。

いろいろ表彰を受けましたのは、表面的には、PREXが表彰を受けたということではありますが、実際には、PREXを支えていただいた関西の企業、とくに研修を快く受け入れていただいている中堅、中小企業の経営者の方々であり、あるいは、PREXの講義内容を豊かにしていただけるシニア専門家の方々、PREXの研修員の人々、そういったの方々に対する広い意味での表彰を受けたものと考えています。どうぞ、これからもPREXの発展のためにいろいろお願いをしたいと思います。ご協力、ご支援をお願いしたいと思います。

以上でこのフォーラムの挨拶といたします。